

## 序

岡田英樹先生は、1968年3月に京都大学文学部文学科中国語・中国文学専攻を卒業され、続いて同大学院の修士課程へと進学、70年3月に修了されました。以降、大阪府立高校の教諭、大阪外国語大学の助手、講師を歴任されたあと、76年4月から立命館大学文学部助教授として着任、90年から同教授に昇任。文学部の教員として、34年間にわたって教育、研究、また校務に携わってこられました。

岡田先生は、文学部の中国語担当の教員として長年、教学に尽力されてきましたが、先生の赴任された当時は、初修外国語としての中国語はドイツ語やフランス語にくらべて少数の受講生しかいませんでした。先生は、いくつかのすぐれた中国語テキストを作成され、授業に創意・工夫を加えられ、現在では全学的にもっとも受講者の多い外国語科目に育てあげる礎を築かれました。また、現代中国文学研究者として、中国文学専攻の演習や講義科目を担当され、同専攻の教学の充実にも大きな力を尽されています。

ご研究の専門分野は、現代中国文学、とりわけ未開拓であった旧満州地域において文学活動を展開していた中国人作家や詩人を中心とするもので、資料を重んじた実証的研究を基盤とされています。また、ご研究の方向性としては、竹内好の言葉に触発され、「歴史の始末をつける仕事」を目指し、近代における日本と中国との関わりについて、文学を通して解明されておられます。岡田先生は、この分野において、日本を代表する研究者であられることは、私たちもよく知るところです。共編著として刊行された『近代日本と「偽満州国」』（不二出版、1997年）、単著の『文学に見る「満州国」の位相』（研文出版、2000年）他、多くのすぐれた著書や論文が公にされています。

先生は、学内役職等においても多大の貢献をされてこられました。外国語教育委員会委員長をはじめ、言語教育センター副センター長、初修外国語部会長など、また、平和ミュージアム企画局長、国際平和ミュージアム副館長などをつとめられ、外国語のみならず、二部教学（二部担当学部主事など）や本学の平和ミュージアムの発展に寄与されました。

学会等におきましても、40年近い歴史をもつ民間の研究団体である中国文芸研究会では、その創設メンバーであり、有数の研究者からなる植民地文化学会では理事・編集委員をつとめておられます。私も、この学会で同じく委員をつとめ、毎年、岡田先生と活動を共にしてきております。その他、現代中国学会、日本社会文学会、韓国における旧満州関連の共同研究、さらには、「舞鶴引揚記念館」の運動というように、幅広く社会的活動もされています。今後、益々これらの研究や社会貢献を持続していかれるとのことで、先生のご活躍をお祈りするものであります。

いささか個人的な思い出になりますが、いまから4、5年前のとある夜、岡田先生と東京のお茶の水駅で偶然にお会いしたことがあります。お互い別の学会の懇親会の帰りで、宿舎の東京ガーデンパレスに戻るところでした。それではとばかり、お茶の水駅前の居酒屋に入り、軽く杯を重ねることになったのですが、すでに心地よい酔いにみまわられておられる先生は、いまとり組んでいる研究テーマ、これから手がけるテーマと、それこそ息も切らずに話され、いつものそれほど饒舌でない先生とイメージが違うので驚いたことを覚えております。岡田先生の研究に寄せる思いの熱さに圧倒された感がありました。この姿勢に、深く学びたいと思ったものでした。

岡田英樹先生に対して、学校法人立命館は名誉教授の称号をお贈りし、その長年のご貢献を讃えます。本会は、ここに、先生のご功績と学恩とに深い感謝を表わし、このご定年記念の論集を編んで、先生に献呈いたします。ありがとうございました。

2010年2月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木 村 一 信